

この6月で、16年という長きに渡って理事長として鶴川学院を支えられた禊準一先生から、その重責を引き継ぐこととなりました。禊前理事長は、財政逼迫後の立て直し、鶴川シオン幼稚園の認定こども園化、新保育棟の建設、そして本田栄一園長の急逝後、80歳を超えて園長に就任するなど、本学院に粉骨碎身の貢献をしていただき、感謝に堪えません。

さて、神様は時として皮肉なことをなされると思います。私は神学校を卒業したあと、出身の北海道に帰って伝道しようと思っていました。ところがし



鶴川学院の理事長に就任して

瀬戸英治（第40回卒）

ばらく東京近辺にいないくてはならない事情ができ、学校の勧めで都内の東中野教会に伝道師として赴任することになりました。これがことの始まりでした。伝道師の任期も終わりましたが、当時専任教師で神学校の事務も支えておられた下田洋一先生（この後事務長を兼務）から、学生寮を新築するので、そのための事務局を手伝ってほしい、それで近隣のまぶね教会が2年間だけ牧師を求めているのでちょうどいい、と話がありました。北海道に帰るすべがなかった私は、この話を引き受けたのです。そして寮建築以後も、学校の事務に携わるようになり、全く経験のなかった財務を担当することになってしまいました。担当してからバブルの崩壊、リーマンショック、そして極端な低金利時代が

押し寄せてきました。心配で夜も寝ることのできない時もありましたが、資産運用において大きな損失を出さず、神学校の財政を少しでも支えられたのは神様のお守りというほかありません。結局、卒業後35年間、北海道への思いを引きずりながら、教会と神学校の間をうろうろとすることになってしまいました。昨年から22年間牧会した鶴川教会を辞し、神学校の事務長として専心してきましたが、今度は理事長として法人の舵取りをしなければなりません。いつも心の中には「自分はその任じゃない」という声があります。これまでも多くの方々に支えられてきましたが、これからお支えをお願いする次第です。

さて、私のことはこれくらいにして、本学院の現状とこれからの課題についてお話ししたいと思います。

本学院は、認定こども園鶴川シオン幼稚園と農村伝道神学

校という異なる教育機関を運営する法人です。鶴川シオン幼稚園は認定こども園に認可を受けて8年目になります。今、園は少子化の波にさらされています。町田市の中でも鶴川地区は激戦区であり、特に1号児である幼稚園児が漸減しており、どの園でも園児の募集に相当な力を注いでいます。保護者がすべて働く家庭の増加、政府の推し進める幼保一体化、保育料無償化の流れもあり、保育園機能を求める保護者が増えています。このような時代の流れを留めることはできませんが、その中でもキリスト教保育を標榜する園として、また神学校とともにある幼稚園として、あるべき保育とはなにか、打ち出すべき特色とは何かという問いを持っていなければなりません。神学校の自然そして熱心な教職員という資産を活かして何ができるか、専門家や幼稚園経営に詳しい諸先輩のアドバイスをいただきながら、幼稚園の経営を行っていきたいと思います。

農村伝道神学校は現在も教職員すべてが非常勤体制という状況が続く、特に教師には負担をかけています。また近年のナラ枯れによる倒木や設備の

老朽化への対応が増え、校地の管理が大きな課題となっています。諸教会の高齢化による寄付金の減少はみなさんのご協力で今のところ顕著ではありませんが、対応策を考えなければなりません。

このように見ると負の課題ばかりが目につきますが、日本基督教団内そして他教派からも農村伝道神学校に寄せられる期待は大きいものがあります。これからのキリスト教界に必要な人材とはどのようなものか、そのための教育環境はいかなるものでなければならぬのか。これからの理事会・評議員会で考えて行きたいと思っています。そのために神学校の教師会と密接に連携してゆきたいと思っています。また従来から求められている継続教育の場や、オンラインを利用した新たな神学教育も教師会と協力して考えて行きたいと思っています。

鶴川シオン幼稚園と農村伝道神学校のそれぞれの歴史と自主性を尊重しながら、学院として一体感の持てる運営を目指したいと思っています。特に同窓生の皆さん、そして支援してくださる皆さんのご理解とご協力をお願いする次第です。

【校長より】

暑い日が続いています。ここ数年の猛暑で木々が弱り、キクイムシに抵抗できずに多くの木が立ち枯れになりました。（環境がバランスを崩していることに私たちが無頓着だったことや、野津田公園サッカースタジアム等の建設で土地そのものが傷ついていることも原因。）立ち枯れた木は倒れる危険が生じますが、地中では根を張り、周りの木々や自然と共存している（人がむやみに倒すと、その周りの木々が枯れ始める）ということを鑑み、基本的に「自然に倒れるまで見守る」というスタンスをとっています。「危険除去のために倒す」のは簡単ですが、人間の都合に合わせるのではなく、環境と共に生きる方法を探り、危険除去

のためには迂回路を作ったりしています。そんななかで無事に木が倒れると、「本当にお疲れ様。倒れてくれてありがとう」と木にねぎらいの声をかけたくなります。

小話。ある日教室のドアに「SOS」と書いた紙が貼ってありました。室内には誰もいない。誰かの訴えなのだろうか、としばらく心穏やかじゃなかったのですが、翌日判明しました。現在農伝のロビーにイーゼル（画架）が置いてあり、そこにパネルが載っているのです。「野津田公園の貴重な湿生植物が、スケート場建設で失われそうになっています、SOS！」それを見た小学生が「SOS」を何枚も書いてイーゼルの脚に貼り付けていました。その一枚がはがれて床に落ちた。拾っ

た人が無意識に教室のドアに貼った。校長はこういうことでも一喜一憂するのです。

【学事報告】

◇6／25～26 修養会

25（水）旧陸軍登戸研究所訪問

26（木）町田自由民権資料館 農村図書館訪問

◇7／18（金）戦争責任シンポジウム「証言 満州キリスト教開拓村 国策移民迎合の果てに」講師・石浜みかさん

◇7／22～25 集中講義「部落解放講座」講師・和田猷一さん

◇夏期社会実習

山崎麻里子（2年）ひびき工房

◇8／28（木）農場・環境ワークショップ

◇8月～10月 神学校日礼拝

永山教会、砧教会、埼玉大通り教会、三・一教会、埼玉和光教会、小諸教会、川崎戸手教会

愛川伝道所、横浜港南台教会、高座渋谷教会、林間つきみ野教会、三鷹教会、川和教会、上大岡教会、相武台教会、大泉教会

◇玉山神学院訪問 9／29～10／3 農伝から平良、石井の両教師が訪問

◇10／21（火）～25（金）公開授業

◇25（土）オープン・キャンパス

【同窓生等個人消息】

任地が変わった等で掲載可の連絡の取れた方を記載させていただきました。異動など変更のある同窓生の方がおられましたら、神学校事務までご連絡いただければ幸いです。

*異動

◇齊藤織恵 教団登録は石島織恵 神学科72回卒）エパタ教会担任 教師就任

【理事・評議員会】

2025年度第1回の理事会・評議員会を6月20日（金）に生田教会にて開催した。新寄附行為が施行により、役員を新たに選出した（末尾に記載）。なお理事長は禊準一氏に変わり、瀬戸英治氏を選出した。また昨年度の事業報告は幼稚園、神学校とも大きな変化はなく、学院全体の決算も約900万円の赤字に収まった。

【理事】安倍愛樹、大沼洋美、小海基、平良愛香、瀬戸英治、中臺厚、比企敦子

【評議員】池迫直人、伊東永子、内城郎子、大柳由紀子、佐藤佐智子、清水信浩、外谷悦夫、牧野義信

【監事】加藤忠良（1名欠員）

※ オンライン授業について、随時対応ははじめました。詳細は本校事務までお問い合わせください。

〒195-0063 町田市野津田町 2024 番地
農村伝道神学校

電話：042・735・5775
e-mail：noden@pony.ocn.ne.jp

修養会報告

6／25（水）登戸研究所
26（木）自由民権資料館

■登戸研究所資料館

1年 牧田東一
修養会のフィールドワークとして6月25日（水）10時～12時に、明治大学平和教育登戸研究所資料館を訪問しました。参加したのは、教師の先生方3名（平良先生、石井先生、有住先生）と神学生2年生2名（山崎、深沢）、1年生3名（西窪、真鍋、牧田）でした。

登戸研究所（正式名称…第九陸軍技術研究所）は旧陸軍の「秘密作戦」のための研究機関で最盛時には1千人近くの技術者等が働いていました。「秘密作戦」とは、防諜（スパイ活動防止）、諜報（スパイ活動）、謀略（破壊・攪乱活動・暗殺・宣伝（人心の誘導）といった戦争の裏側で行われていた作戦で、登戸研究所の研究内容には人道上あるいは国際法上、大きな問題があるものも含まれていました。

最も非人道的なものは暗殺用の毒物や生物兵器でした。ここで開発された生物兵器は、有名な731部隊が中国人捕虜に人体実験したときの生物兵器につながるものでした。登戸研究所

の一部の研究員は実際に中国での「実験」に参加しているそうです。これらの「実験」に参加した人々は戦後、アメリカ占領軍に実験情報を提供する代わり

に東京裁判を免責され、一切の罪に問われていないそうです。

中華民国政府の紙幣の偽札作りが行われていたのも興味深かったです。非常に精巧に作られていましたが、ピン札は逆に偽札と疑われたそうで、古い札に見せかける工作も行われました。

風船爆弾（気球爆弾）が1千発も作られ、3／4割は実際に米本土に届いていたことには驚きました。また、気球が和紙と蒟蒻汁で作られていたのも想像外でした。焼夷弾でカリフォルニアに山火事を起こすことが狙いだったのですが、季節の関係で上手いかなかったようです。生物兵器を搭載することも検討されたのですが、敗戦が見えていた時期なので、終戦後に国際法違反を問われることを恐れて実施されなかったそうです。

研究所には地元の人が多く雇われていましたが、彼らは守秘義務を課せられていて、戦後

にも誰も語らなかったので、研究所の実態は知られていませんでした。川崎の市民が調べ始め、ある女性事務員の方が持ち出していた雑書類の束が見いだされ、研究所の内実が分かるようになりました。また、高校生が研究をしたことで、責任者が重い口を開いてくれたそうです。市民の力が重い歴史の扉を開いてくれたのです。

■自由民権資料館を訪れて



1年 西窪幸子

参加者は学生6名、先生2名。資料館の学芸員だった杉山先生から、展示の解説を伺いました。町田市立自由民権資料館は、多摩地域における自由民権運動の歴史を伝える施設で、一九八六年、凌霜館の跡地に建てられました。凌霜館とは明治期に村野常右衛門が設立した文武道場で

あり、若き民権活動家たちの学び舎でもありました。資料館では当時の新聞や演説草稿などの資料が展示されており、自由民権運動の歴史を体験的に理解することができま

す。自由民権運動とは、明治初期に国民が政治参加を求めて起こした社会運動です。明治七年、板垣退助らが提出した「民権議院設立建白書」がきっかけとなり、言論の自由や国会の開設を

求める声が各地で高まりました。演説会が盛んに開かれたり、政治結社が作られたりして、国民の意識も次第に変化していきま

した。教科書では政治的な動きとして語られがちですが、実際には人々の生活や価値観の変化と密接に結びついた社会運動であり、近代日本の民主主義の基礎を築いた重要な動きでした。

資料館に入っ

たのは、演説のためのポーズの指南書と「自由」という言葉が流行語大賞のように至る所で使

われていたことを示す資料です。明治維新が人々にとって良い変化だったのか、それとも望まない変化だったのか、その判断を迫られる中で、人々は自分の理想を演説という形で語り、共感を得ようとして

しました。演説会が新聞で紹介され、多くの人が演説を聞きに集ま

っている絵も紹介されていました。印刷技術の進化も自由民権運動を支えたことがわかりま

した。また、「自由」という言葉がメンコやオカモチにまで使われていた資料もあり、明治時代の人

がどのような「自由」を理解していたのかまではわかりませ

んでしたが、新しい時代が来たという喜びと期待が感じられま

した。ここには明治になって日本に入ってきたキリスト教の影響もみられま

す。自由民権運動は憲法が制定され、国会が開設されたことで下火になっていきました。自由民権家は元々村の長的な人たちが裕福な人

たちだったことは意外でした。また、江戸時代には徳政令があ

ったので、天災等で

常な暑さや豪雨災害などにより、あるいは昨年来、米の価格が上

がってきて改めて農業や食の問題に気がつかされたひと

も少なくないでしょう。正確には食の問題ではなく、人間の欲望を充足するための社会のあり方

の問題であり、本校では「校地・農場」に現れて

いたのです。20年前に本校に着任した時、まず「森が荒れている」とわたしは直感

した次第です。ひと言で言えば脚下照顧ですむ

のですが…。

方や「農業」は、大脳皮質だけの言語によ

って経済をはじめ学術的に論文などにも比較

的容易に適応することができると思います。「農業」は、工業や情報通信産業など、他の2

次3次産業とも共存して資本主義社会に統合的に組み込まれてい

ます。しかしながら「農業」は、人間の脳内活動では決して把握しきれない「農」の一部

です。天候をはじめとする自然に依存するがゆえに、狭小な資本主義制度、あるいは人

間の欲による対象操作に治めきれない側面があります。このあたりを、工藤昭彦さんは、明治以後の農業政策との関係

において論じています。「農業問題とは資本主義が解決できない問題である」と指摘なさ

っているのです。

食べられなくなったら借金は棒引きされていたが、明治時代になると土地は没収されてしまい、困窮する人々がい

たことも、今回初めて知りました。

【戦争責任シンポジウム報告】

1年 真鍋 泉

7月18日に戦争責任シンポジウムが開催され、21名が参加した（内、学外からは8名）。前半は石浜みかるさんの講演「証言・満州キリスト教開拓村」

、国策移民迎合の果てに」、後半は石浜さんを囲んで分かち合

いの時を持った。

1932年3月1日、日本は傀儡国として満州国の建国を宣言した。政府は日本人を満州へ組織的に移住させる国策を推し進めた。

農民から開拓団を組織して渡航して行ったが、移民の中には「キリスト教開拓団」の存在があった。異境の地について知見も不十分、農業の技術もま

ちながら、満州に開拓村を作



るのは良いことと信じて渡ったのである。しかし、彼らが赴いた土地は、先遣隊として派遣された関東軍が、収奪といつてもよい程の安価な価格で、先住者から奪った土地であ

った。戦後、かろうじて引き揚げて来た団員も、自分達

がしてきたことの疚しさに苦しみ続けることになる。

1967年の日本基督教団戦争責任告白に、戦時下「わたくしどもは『見張り』の使命を

ないがしろにいたしました」という言葉がある。『見張り』の使命とは、過去と同じ過

ちを繰り返さないこと、過去の過ちをな

かたにしようとする流れに、断固抗うことである。私

たちは今、知らず知らずの内に流されて、曖昧な同調を

していないだろうか。過去に向き合い、現在を問

い直すことは、隣人と共に生きる未来の構築へと繋

がっていく。「満州で何があったのか」を伝え続けること

は、『見張り』の使命なのである。

【農村伝道研究室より】

教師 池迫直人

先に「農」という言葉が、その人なりに都合よく用いられるところから、混乱が生じているとい

うことを申しあげました。以下に「農」をめぐる

いくつかの思いをくまに述べてみます。

「農」という言葉は、分節的に理解すると誤解を生じるのです。どちらかという

と俳句や詩文などで用いられる言葉に近い

とわたしは思われます。なぜなら「農」を論ずるに

あたつては、「水」が考慮されなければなら

ない、「土」も、「太陽」、「月」となると、ミ

クロからマクロ、宇宙というひろい自然

界の森羅万象を包み込むのです。万象とい

うのは、動的変動的、無常であること

です。そしてそのたえず変わりゆく境

界線を時間が静止したかのように定め

ることができない、またこの世界で人間

は主体ではあり得ません。すべての存在

の一つでしかあり得ない、自分以外の

被造世界に身を委ねなければならない

ので、人間が主語で語ることができるの

だろうかと問われます。

表現が抽象的すぎますので、経験から

ひとつ事例を紹介しま

す。もう30年近く前のこと

です。

が、当時仕えていた田瀬教会の農民信

徒を訪ねた時、稲の種籾を塩水洗な

さっている最中でした、曰く、「毎年

お米の出来具合を予測はできに、ほと

んど恵みやに…」と心に響くように

つぶやいておられました。ところで本

校では「農の視点」という言葉により、

神学教育の志向を論じていますが、そ

こで論じているのは実は「農」ではなく

「農業」であり、その問題を論じた上

で、類比的に「人権・平和」の観点か

ら、共有課題とすべき問題に焦点を当

てています。ここが農場廃止を経て、

その後「農」が捨棄されていく転換点

ともなっているのだと思います。（この

類比、アナロジーの技術は、説教など

で牧師が多用し、詭弁の詭を受けかね

ません、自戒します。）

その際、論ずる主体が日々の生活を営

む基盤は、資本主義社会、その矛盾を

等閑視した上で「人権・平和」の問題

を論ずるために、結果的に資本主義制

度の恩恵にあずかりつつ、「犠牲のシ

ステム」を避けられない社会において

、「農」には犠牲が強いられていくと

ころに、関心が向けられないようにな

ったのでし

ょう。それにしても近年の夏の異